とやまの教育史料

戦火を逃れて富山へ来た子どもたち

学童集団疎開 80周年

どりーむくん

期　　間：　令和6年 4月18日(木)～6月30日(日)

会　　場：　富山県教育記念館　1階ギャラリー

開館時間：　午前9時～午後5時（入館は4時半まで）

◆感染症拡大予防のお願い
1．場に応じたマスクの着用
2．入館時の手指の消毒

－主催：(公財)富山県ひとづくり財団・富山県教育記念館　共催：富山県教育委員会－

「とやまの教育史料 戦火を逃れて富山へ来た子どもたち」

～ 学童集団疎開 80 周年 ～

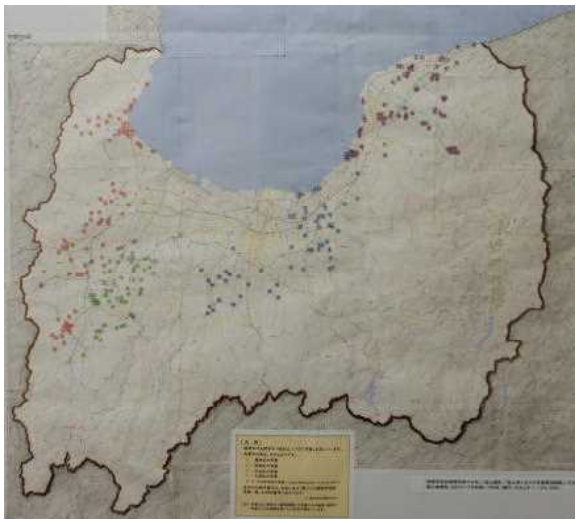
「学童集団疎開」は、今からちょうど８０年前の太平洋戦争末期、アメリカ軍の本土爆撃に備え、東京・大阪・名古屋等、大都市部の国民学校初等科の学童を、学校単位に集団で、より安全な地域に一時移住させたことをいいます。その総数は日本全体で約５８万人以上と推計され、富山県も東京都内の４つの区から１５,０００人超の学童を受け入れました。

開戦当初、快進撃を続けた日本軍は、ミッドウェー海戦やマリアナ沖海戦での敗戦等により制海・制空権を失い、以後、日本の都市はＢ-29 爆撃機によるたび重なる空襲に見舞われることになりました。

本土空襲の危機が高まる昭和 19 年６月末、国は『学童疎開促進要綱』を発し、学校単位の集団疎開の実施を決定。８月には「第１次疎開」を開始し、翌 20 年春、都市部での大空襲後には、低学年を含むすべての学童を対象とする「２次疎開」や「再疎開」を強行します。学童集団疎開は、表向きは子どもたちをより安全な地域へ移住させることでしたが、真のねらいは、「防空の足手まといを無くして防空態勢を整える、空襲の惨禍から若い命を護り、次代の戦力を温存培養する」ことでした。

いつの時代も戦禍に巻き込まれるのは弱い立場の者、特に子どもたちです。今日、世界ではグローバル化が急速に進む一方で、各地で偏見や分断が深刻化し、紛争・侵略が勢いを増す危機的状況にあります。

今回の展示では、これまで弊財団・教育記念館が調査収集してきた事柄や収蔵品等を中心に、東京から富山へ逃れて来た子どもたちの生活の様子を語る資料や絵日記等を展示します。それらを通して、疎開の実相やその時々を子どもたちがどのように受け止めてきたのかを感じ取り、改めて平和の大切さを考える機会を提供します。「とやまの教育史料に学ぶ」、どうぞご覧ください。



「県内の集団疎開学童受け入れ地(学寮)分布」

「当時、子どもたちが使っていた机」
（昭和 19 年新調、朝日町・常光寺 所蔵）

【上】「疎開生活の実際」
（疎開準備・富山へ）
（１日の暮らし・学びと食事）
（満たされないからだと心）
（「600 日の絵日記」福光にて）
【左】「今もつづく学校間交流」
（富･三成小学校、射･金山小学校）